『國民新報』1939年6月11日

生活の美化（美術展覽会を機に）[[1]](#footnote-1)

　十八がにである。、、、の四よりなつてて、ににいたのをめたもので、それだけおにがえたである。このきはにへらるべきもので、、など[と]にのを□め、しくし、くし、くするののなのである。

　くき、しくき[、]かにきることがのであり、にのであるが、それだけではりない。そのにしくきることによつてのはうせられるのである。く、しく、かに、しくと、かうけてへるのはのからであつて、その一のなのでありもつとにへばこの四ツのは一のなのである。くと云ふのががしこさをするものでないのとじく、しくとはや、をするのではない。をりをきらびやかすのがではない。それはつてあるものゝづるところで、ななのである。いたでも、てがよくし、にきめられてをればそれが『しく』であり、つぎはぎのでも、よくつてきちんとしにつてをればそこからはずるものである。さなやはの一によつてせられ、しいもやきうりの、よそひによつてさをすものである。とはや、のこなし、ののをすもので、のそのものがすることである。

　く、しくきることがのかゝることでないのとじく、しくきることもしてのかゝるものではない。をすることによつて々はのびとしみとをすることがるとに、々のにはひやゆとりがじて一のをきなる、をすことが、これが、、をし、、、びやをするである。

　のはにのな一たるべきであり、にのくからはされたなのんだにいて一そのをずるものである。とはされたをする。

1. この文章は、単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)